

Abstract (Basic): JP 61015813 A

Cosmetic face-pack comprising (1) one or more of water soluble natural polysaccharide or its salt, (2) one or more of protein or its salt and (3) an aq. phase component.

(1) is e.g. microorganism producing polysaccharide (plurane, dextran, xanthan gum, succinoglucan, shizofuran, etc.), plant producing polysaccharide (potato starch, corn starch, locust bean gum, gum arabic, carrageenan, gum tragacanth, etc. The additive amt. of (1) is pref. 0.1-50 wt.% of all cosmetic compsn. (2) is casein, serum albumin, gelatin, amylase etc. Pref. amt. of (2) is 0.5-50 wt.%. (3) is not specifically limitative and may be anything used for cosmetics e.g. ethylene glycol, glycerin, glucose, maltose, sorbitol, amino acid honey, water, etc.

re much

USE/ADVANTAGE - Smoothness and wetness of the cosmetic improved due to synergistic effect of (1) and (2). (4pp Dwg. No. 0/0)

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭61-15813

⑬ Int. Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和61年(1986)1月23日

A 61 K 7/00

7306-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

⑮ 発明の名称 パック化粧料

⑯ 特 願 昭59-138379

⑰ 出 願 昭59(1984)7月2日

⑱ 発 明 者	宇 治 義 隆	大阪市東成区東中本3丁目13番8号 東洋ビューティ株式 会社内
⑲ 発 明 者	山 下 昭 夫	大阪市東成区東中本3丁目13番8号 東洋ビューティ株式 会社内
⑳ 発 明 者	柴 山 裕 治	大阪市東成区東中本3丁目13番8号 東洋ビューティ株式 会社内
㉑ 出 願 人	東洋ビューティ株式会 社	大阪市東成区東中本3丁目13番8号
㉒ 代 理 人	弁理士 鎌 田 文二	

明 細 書

1. 発明の名称

パック化粧料

2. 特許請求の範囲

水溶性天然多糖もしくはその塩の少なくとも1種と、蛋白質もしくはその塩の少なくとも1種と、さらに水相成分とからなることを特徴とするパック化粧料。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

この発明は保湿度および安全性に優れ、清浄効果の大きいパック化粧料に関するものである。

〔従来の技術〕

近年、化粧料に関する技術の進歩は目ざましく、数多くのパック化粧料も開発されているが、その多くはポリビニルアルコールを皮膜剤とし、これに合成樹脂エマルジョン、粉体などを加えた粘潤な組成物であつて、これを顔面に塗布し、この塗膜が乾燥固化すればこれを剥離するのである。そしてこれらパック化粧料の期待される効果が、つ

ぎの諸点であることがよく知られている。すなわち、

- ① 皮膜形成により皮膚に適度の緊張感を与える。
- ② 皮膜形成により皮膚温を高め血行を良くする。
- ③ 皮膜形成により水分の蒸発を防ぎ肌への保護を促進する。
- ④ 皮膜の吸着作用によつて皮膚表面の汚れを取り除く。

などである。

〔発明が解決しようとする問題点〕

しかし、このような従来の皮膚性パック化粧料においては、皮膜形成後に剥離しなければならなことから、皮膚への調子を与えるための保護成分を多量配合することが不可能であること、および、皮膚表面の清浄は皮膜の吸着作用のみに依存して十分な清浄効果が得られないことなどの欠点があり、これらの欠点を解消することが、この発明の重要な技術的課題である。

〔問題点を解決するための手段〕

上記の技術的課題を解決するために、この発明

は水溶性天然多糖もしくはその塩の少なくとも1種と、蛋白質もしくはその塩の少なくとも1種と、さらに水相成分とからなることを特徴とするパフク化粧料を提供するものであり、以下その詳細を述べる。

まず、この発明における水溶性天然多糖とは、通常自然界から得られる多糖であり、例えばプルラン、デキストラン、キサンタンガム、ゼンコート、ゼンフロー、カードラン、サクシノグルカン、系271ガム、シゾフラン等の微生物多糖、およびバレイショデンプン、トウモロコシデンプン、コメデンプン、カラギーナン、アルギン酸、ファセラン、グアーガム、ローカストビーンガム、クインシードガム、タラガム、カラヤガム、アラビアガム、アラビノガラクトンガム、トラガントガム、アルゲコロイド、ペクチン、マンナン、グルコマンナン、アロエベラ等の植物性多糖、およびヒアルロン酸、コンドロイチン、コンドロイチン硫酸、デルマトン硫酸等のムコ多糖を利用することができる。また、このような水溶性天然多糖

(3)

つぎに、この発明における蛋白質とは、通常自然界から得られる蛋白質であつて、たとえば、カゼイン、大豆カゼイン、卵白アルブミン、血清アルブミン、リゾチーム、大豆蛋白、小麦蛋白、ホエー粉末、ケラチン、セラチン、エラスチン、水溶性コラーゲン、アミラーゼ、ペプシン、エノラーゼ、キモトリプシノーゲン等を例示することができるが、これら蛋白質を塩として使用するときには、塩を形成する物質、たとえば、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化アンモニウム、水酸化カルシウム、水酸化マグネシウムなどの無機塩基、およびアルギニン、リジン、ヒスチジン、オルニチン等の塩基性アミノ酸(D体、L体、DL体のいずれであつてもよい)、さらにモノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、アデニン、グアニン、ヒポサンチン、アデノシン、グアノシン、イノシン、トリプタミ、グルコサミン等の塩基性アミン等の塩基が利用されるが、これら塩は別途予め製造されたものであつてもよく、また、パフク化粧料の製造過程

(5)

を塩として使用するときには、塩を形成する物質として、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化アンモニウム、水酸化カルシウム、水酸化マグネシウムなどの無機塩基、およびアルギニン、リジン、ヒスチジン、オルニチン等の塩基性アミノ酸(D体、L体、DL体のいずれであつてもよい)、およびモノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、アデニン、グアニン、ヒポサンチン、アデノシン、グアノシン、イノシン、トリプタミ、グルコサミン等の塩基性アミン等の塩基が用いられる。これら塩は別途予め製造されたものであつても、また、パフク化粧料の製造過程で生成されるものであつてもよい。

以上の水溶性天然多糖またはその塩からなる群のうち少なくとも1種類を用いるがその配合量はパフク化粧料全量の0.1~50多(重量、以下同じ)が好ましい。なぜならば、0.1多未満の少量では皮膚形成が悪く、皮膚に対する緊張感が得られず、また逆に50多を越える多量では溶解が困難になつて好ましくないからである。

(4)

中で生成されるものであつてもよい。

以上の蛋白またはその塩からなる群のうち少なくとも1種類を用いるが、その配合量はパフク化粧料全量の0.5~50多が好ましい。なぜならば0.5多未満の少量では皮膚の清浄性が悪く、また50多を越えると感性的に好ましくないからである。

また、この発明における水相成分とは、通常のパフク化粧料に用いられている保水成分を主とする水溶性物質であつて、たとえば、エチレングリコール、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール、グリセリン、ジプロピレングリコール、ポリアルキレングリコール、ジグリセリン、トリグリセリン、ポリグリセリン、グルコース、マルトース、マルチトール、マンニトール、シロ糖、フラクトース、ソルビトール、キシリトール、ハチミツ、マルトトリオース、エリスリトール、デンプン分解糖、デンプン分解糖還元アルコール、d-1-ピロリドンカルボン酸、d-1-ピロリドンカルボン酸ナトリウム、乳酸ナトリウム、アミノ酸、

(6)

アミノ酸塩、化粧用アルコール、水などを例示することができるが、特にこれらに限定するものではない。

上記水相成分の群のうち少なくとも1種類を用いるが、使用目的によつては化粧品業界で従来から広く使用されている添加剤、薬効成分、香料、防腐剤、色素などを適宜添加しても何ら支障のないことは勿論であつて、水相成分の配合はパック化粧料全量の5～99.5%が好ましい。なぜならば5%未満の少量の水では水溶性天然多糖の溶解が不充分であるからである。

以上述べた水溶性天然多糖もしくはその塩の少なくとも1種と、蛋白質もしくはその塩の少なくとも1種と、水相成分とを混合するにあつては、各成分の溶解速度を高める一方で、有効成分の気散および分解等を防ぐために、常温から80℃以下の温度のもとで均一溶解することが望ましく、このようにすれば均質で粘潤なパック化粧料が得られる。

〔作用〕

(7)

第 1 表

	成 分 名	実施例 1	実施例 2	実施例 3
A	キサンタンガム	1		2
	クインシードガム		2	3
	バレイシヨダンブシ	5	10	
	ヒアルロン酸ナトリウム	0.3		
B	カゼインナトリウム	10		15
	アルギニン		30	15
C	グリセリン	20	10	20
	1,3-ブチレングリコール	20	10	10
	水	33.7	33	30
	エチルアルコール	10	5	5
評 価	皮膚の緊張感	28(70)	35(88)	34(85)
	パック後の保湿感	35(88)	33(83)	33(83)
	皮膚の清浄効果	32(80)	38(95)	37(93)

の結果を第1表に併記した。

評価方法

成人女子20名による官能試験で、皮膚の緊張感、パック後の保湿感および皮膚の清浄効果の3

(8)

この発明において、水溶性天然多糖およびその塩は皮膚形成剤として作用し、皮膚に適度の緊張感を与え、従来の皮膚性パックと異なり任意の保湿性水相成分を配合することができるので、皮膚への保湿性を一段と高められる利点がある。また蛋白質およびその塩が、前記水溶性天然多糖およびその塩とともに相乗的に作用し、吸着性および皮膚に対する適度の洗浄性を発揮し、皮膚表面を清潔にする作用がある。

〔実施例および比較例〕

実施例 1～3：

水溶性天然多糖またはその塩をA成分、蛋白質またはその塩をB成分、さらに水相成分をC成分とし、これら各成分を第1表に示す割合で配合した。配合に際しては、まず、AおよびB成分をエチルアルコールを除くC成分中に加え、80℃に加温して均一に溶解させた後、これを冷却し50℃になった時点でエチルアルコールを加え、室温放置して、パック化粧料を得た。得られたパック化粧料についてはつぎの方法によつて評価し、そ

(8)

点について、いずれも「あり」とするものを2、いずれも「ややあり」とするものを1、またいずれも「なし」とするものを0として、20名の合計点を求め、さらに有効性(%)として

$$\text{有効性} = (\text{合計点} / 40) \times 100$$

を求め、その値を()内に記載した。

比較例 1, 2：

A, BおよびC成分の配合を第2表に示す割合にした以外は実施例1～3と全く同様にしてパック化粧料相当品を調製し、得られたものの評価を行なった。その結果は第2表に併記したが、第1表と比較して、評価結果のバランスが極端に悪いことがわかった。

実施例 4：

常温下で、プルラン1.0部(重量、以下同じ)、クインシードガム1.0部、ヒアルロン酸ナトリウム0.1部、コンドロイチン硫酸ナトリウム0.3部、バレイシヨダンブシ7.0部、カゼイン13.0部、アルギニン3.0部、セリン0.2部、メチルパラベン0.1部の8成分を充分に攪拌し、ついでこれに

第 2 表

		比較例 1	比較例 2
A	クイーンレードガム		2
	バレイシロテンブシ		10
B	カゼインナトリウム	15	
	アルブミン	15	
C	グリセリン	20	10
	1,3-ブチレングリコール	10	10
	水	35	63
	エチルアルコール	5	5
評	皮膚の緊張感	2(5)	32(80)
	パック後の保湿感	31(78)	28(70)
価	皮膚の清浄効果	36(90)	4(10)

マルチトール 5.0 部、グリセリン 5.0 部、1,3-ブチレングリコール 10.0 部、d-1-ピロリドンカルボン酸ナトリウム液 5.0 部、グリセリン 10.0 部、精製水 32.2 部を加え、80℃に加熱して均質に溶解した。溶解後約 50℃まで冷却して、エタノール 7.0 部および香料 0.1 部を加え、室温下

00

悪いことが明白であつた。

〔効果〕

以上述べたことから明らかなように、この発明のパック化粧料は、従来のパック化粧料よりも遙かに皮膚への保湿度（保湿性、しつとり感）、清浄効果を高め、皮膚の緊張感とともにパック化粧料が本来具備すべき諸性質をバランス良く有してものであるから、この発明の意義はきわめて大きいと云うことができる。

特許出願人 株式会社 岩瀬健次郎商店

岡 代理人 鎌 田 文 二

に放置してパック化粧料を得た。このパック化粧料についても実施例 1～3 と同様の評価を試み、得られた結果を第 3 表に示した。

第 3 表

		実施例 4	比較例 3
評	皮膚の緊張感	38(95)	40(100)
	パック後の保湿感	36(90)	7(18)
価	皮膚の清浄効果	36(90)	6(15)

比較例 3:

精製水 72.3 部、ポリビニルアルコール 14.0 部、カルボキシメチルセルローズ 0.5 部、グリセリン 2.0 部、ポリエチレングリコール (1500) 3.0 部の混合物を約 90℃に加熱し、ホモミキサーで溶解する。溶解後約 50℃まで冷却して、エチルアルコール 8.0 部、メチルパラベン 0.1 部、香料 0.1 部の混合液を加えてよくまぜ、室温下に放置してパック化粧料を得た。このものについても実施例 1～4 と同様の評価を試み、その結果を第 3 表に併記したが、評価結果のバランスはきわめて

02